

---

# 例え君が...

恋太

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

例えば君が…。

### 【Nコード】

N6680C

### 【作者名】

恋太

### 【あらすじ】

雪乃の優しく綺麗な笑顔にヒトメボレした、輝！でも、雪乃には恋人が？そんな苦悩の末、輝の想いはどうなる？？

## 一話・プロローグ

僕は君がスキだ。

例え君が誰をスキでも……。

高校に入学して、クラスで初めて君を見て、僕はヒトメボレしたのかもしれない。

でも、本当に君をスキになったのは高校一年の夏。

「今日も暑いね、でももう少しで夏休みだから、ガンバろうー！」

って、いきなり話しかけられた時の、何て事ない君の笑顔だった。

すごく綺麗で、優しい笑顔だった。

僕の名前は、如月輝（きさらぎ、ひかる）

今日は二年生になって初めての登校日。  
僕は校門を通って直ぐ張り出されクラスわけを見る。

「やった！」

思わず声に出してしまった…。

だって、僕のヒトメボレの相手、木下雪乃（きのした、ゆきの）さんと、今年も一緒だから。

「輝〜な〜にが、やったのかな〜？（笑）」

話しかけて来たのは、竹内聖人（たけうち、まさと）小、中、高とずっと一緒に親友かな…。

「あつ、おはよ！聖人」

「あつ、じゃね〜よ！ど〜せ、木下と同じクラスだから喜んでんだろ〜？（笑）」

「なつ、ち、違うよ。聖人とまた一緒だから喜んだだけだよ。」

「ふ〜ん。（笑）」

聖人はニヤニヤしながら、

「先に行くな。」と、行ってしまった。気づいてるのかな?と、考えてる時に声を掛けられた。

「おはよう。如月君、また一緒だね。よろしくね!」

「うん。うん。よろしく木下さん。」

## 一話・プロローグ（後書き）

初投稿です！

比較的早め更新するつもりです。  
よろしく願います！

## 二話

く昼休みく

「輝く！飯食いに行こうぜく！！」

「うん。」

僕達が廊下を歩くと目立つようだ。  
とゆうより、聖人が目立っている。

聖人は着崩した感じの制服スタイルだ。  
僕は普通だけど。

中学の頃からか、聖人は、いわゆる不良と呼ばれる分類になった、髪を染め、ピアスを付けて、タバコを吸い、時には喧嘩もしていたようだ。

でも、僕の大事な親友！例え見た目が怖そうで、おまけに目付きが恐そうでも！

小学校からずっと一緒に、何をするにもいつも一緒に居た僕達。  
見た目は変わっても中身はずっと変わらない。

時に僕をからかったり、茶化したり、誰よりも僕を知ってるから  
僕の思考を読んでからかうのが、たまに傷だけど！

「ん〜！い〜風だぜ〜。」

屋上で買ってきたパンを食べおわり、聖人は一服している。  
さすが不良だね。

「木下の事好きなん？」

「えっ」

いきなり木下さんの話しになって僕は動揺した。

「ぼ、僕は…」

「好きなんだろ？」  
「う、うん。」

やっぱり聖人に気づかれていた、僕はあまり態度にだしてないつもりなのに、さすが親友だ。



「如月君？」

「如月君、当てられてるよ？」

「えっ？」

今は午後の授業中だった。先生に当てられた事より、いきなり木下さんに話し掛けられた事に驚いた。

「如月君が授業中にボーっとするなんて、珍しいね？大丈夫？」

綺麗な笑顔で心配する木下さんを見て、やっぱり僕は木下さんがスキなんだと再確認する。。

### 三話

く家く

木下雪乃さんは綺麗で、優しい人、いつも笑顔を絶やさない人、神秘的な雰囲気をもつ人。

学校でも有名で、女子と言ったら必ず名が上がるだろう。

「ハア。」

僕は落ち込んでいる。それは、今日学校の帰りに一年生のウワサ話を聞いてしまったからだ。

「ねえ？聞いた？三年の橘先輩って彼女いるんだって！！」

「えっ？嘘？誰、誰？」

「二年の木下さんだってっ！！」

「嘘っ？美男美女じゃん！」

「だよねっ！お似合いだねっ！！」

「えっ？ウチ、ちょっと橘先輩狙ってたっ！ショックっ！」

「無理無理！あんたじゃ相手にもされないってっ！（笑）」

「ヒドおっ！（笑）」

『きゃはははははは』

そんな話を聞いた僕は、どうやって帰ってきたかわからない位、落ち込んでいた。

木下さんの彼氏？橘先輩？橘秋次（たちばな、しゅうじ）

彼は学校で有名なイケメンだ。

カッコいいと言えば必ず名が上がるだろう。

木下さんと橘先輩……………お似合いだ。

「ハア。」

僕はため息を吐いて電気を消した。

（朝、教室）

「あつ、如月君、おはよう！」

「おはよ、木下さん、あの…」

「どうしたの？元氣ないね？寝不足？」

「ううん、なんでもない。」

僕は木下さんに、橘先輩の事を聞こうと思っていた、でも、僕は聞けなかった。

もし、

「付き合ってるよ」って言われたら僕は立ち直れないだろうな。うん。。

## 四話

「教室」

木下さんに橘先輩の事を聞こうと思った日から、3日が過ぎた。  
今だに聞けない僕。

「ハア。」

「最近ため息多いね、如月君。」

「う、うん？そうかな？」

君のせいだよ！なんて言える訳もなく。

「悩みとかあるの？」

「えっ？あ、ないない、眠いだけだよ！（嘘）」

「ふん、あ！恋愛の悩みとか？？」

ビクツ、す、鋭いのか、鈍いのか、わからない人だ。  
僕が答えないからか、木下さんは続けた。

「如月君は好きな人いる？」

「えっ？」

「私はいるよ、好きな人！好きな人の事を考えると、悩むけど、でも考えてるだけで、うれしくなってくるの。」

少し照れながら語る木下さんの頬が赤い。

そんなに橘先輩の事が、好きなのか…。

「木下さんの好きな人は、どんな人？（僕は気づいたらこんな質問をしていた）」

聞きたくない。

そんなふうに思っていると。

「ん、何を考えてるかわからない人！」

「えっ？」

「いっつも、明後日の方行を見てる人！かな。私も良くわからないんだ！（笑）」

「よ、良くわからないって、それなのに好きなの？」

良くわからない人が好きって事？木下さんは不思議系が好きって事なのか？　僕は木下さんの事が、わからなくなってきたよ。あれ？でも、橘先輩ってそんな不思議な人じゃないような気が…。

「うん！大好き！」

木下さんは照れながらもはつきり答えた。

いつも笑顔な木下さんは、より、愛らしく笑っていた。  
そんな笑顔を見た僕は複雑な心境だった。。



## 五話（前書き）

遅くなりました！

## 五話

く家く

あんなに愛らしい笑顔で大好き！だって、橘先輩が羨ましいよ…

「ハア。」

やっぱり複雑だ、あんなに可愛らしい笑顔を見て良かったけど、その笑顔が他の人に向けられているんだから。

僕は木下さんが好きだ！でも、木下さんは橘先輩の事が好き。

「ハア。。」

失恋ってこんなに悲しいのか……

「もう、寝よう。」

く朝く

「よう、輝！はよ」

「えっ？あつ！聖人おはよう。」

「テンション低っ！どうした？」

「…なんでもないよ、それより、久しぶりだね、聖人、あんまりサボったらダメだよ！じゃ行くね。」

「あ、ああ（テンション低、俺がサボってる間になんかあったのか？？）」

教室をめざして廊下を歩いてる途中、見たくない場面を見てしまった。

「ハハハ、そうなんだ！やっぱり秋ちゃん（橘、秋次）たちばなしゅうじ）すごいね！」

「そんな事ないよ。雪乃だって…」

僕はその場から直ぐに立去った。

楽しそうに笑って話をする木下さんと橘先輩。

秋ちゃん（しゅうちゃん）、雪乃、って呼びあつてた。

二人の仲を見せつけられた気がする。

「ハア。」

どうしようもなく悲しくて泣きそうになっていた僕は、一時間目からサボって屋上で気分を落ち着かせる事にした。

そのまま僕は屋上で眠ってしまった。

## 六話（前書き）

更新が遅くなったのもう一つ更新します。

## 六話

く屋上く

「zzz。」

「如月君、如月君起きて、如月君。」

「ん、んん！えっ？」

「おはよう！如月君。」

「…おはよう、木下さん……。」「

僕はいつの間にか、寝てしまったようだ。

お似合いの美男美女を見て、落ち込み寝！してたんだ。

「えっと？今は何時間目？」

「今は三時間目と四時間目の間の休み時間だよ！」

「そっか。そんな寝てたんだ僕。」

「珍しいね、如月君がサボってるなんて？何かあったの？」

心配そうな顔で聞く木下さん、やっぱり僕は木下さんが好きだ…。

「と、特に何もないよ！眠たかったから（笑）（嘘）」

《キーンコーンカーンコーン》

「……」

「……。」

「い、行かないの？」

「…うん。」

「き、木下さん？」

「如月君は何を見ているの？」

「如月君は何処を見ているの？」

「如月君は何に悩んでいるの？」

「木下さん？」

「……」

「……。」

いつもの笑顔はなく、真剣な顔の木下さん。

僕はなんて答えたら良いのかわからなかった。

ただ、沈黙が続いた。



すると、深呼吸をしてから木下さんが。

「私、《ガチャッ》」

『ビクッ』

二人、びっくりしてドアを見た。

先生

「お前達授業中に何をしてるんだ！（怒）」

僕と木下さんはその場で、説教をされ、教室に戻された。

「お、怒られたね。」

「う、うん…。」

なんだか、気まずい雰囲気だ。

木下さんの頬がほんのり赤いような気がする、目も少し潤んでる。

先生に怒られて、怒っているのか、泣きたいのか、それとも別に何かあるのかな？よく僕には、わからなかった。



## 七話（前書き）

いよいよ動き出した。果してどんな運命が？

## 七話

〈教室〉

昨日の木下さんは何かおかしかった。

授業をサボるのもそうだが、何か悩んでるような怒ってるような、僕には、良くわからなかった。

ふと、木下さんを見ると友達と楽しそうに話している。

いつもの笑顔で笑ってる、良かった、いつもの木下さんだ。

〈放課後〉

今日は木下さんと話せなかった、朝は、いつもの木下さんだと思っただけ、何となくきこえない感じだった。

僕は、気付いた。

やっぱり木下さんが好きだ。

たった1日、話せないだけでこんなに苦しくて、悲しいなんて。

例え、橘先輩と付き合ってたとしても。

例え、木下さんに好きな人が居ても。

例え君が、他に好きな人が居ても、僕はアナタが好きです。

く家く

僕は、決めた、明日木下さんに告白する。

フラれても良い、僕の気持ちを伝えたい。

「よし！」

明日のためにも今日はもう寝よう。

（教室）

《キーンコーンカーンコーン》

「木下さんちょっと話があるんだけど、良いかな？」

「き、如月君？どうしたの？」

「……良いかな？（真剣）」

「あつ……わ、わかった。」

「屋上」

「……」

「……。」

「は、話して何かな？如月君。（照）」

「僕は……。」

## 七話（後書き）

こんにちは いよいよって感じですね！

いつも見ていただきありがとうございます。

評価や感想も今後のためにどうか宜しくお願いします！！



## 八話

く屋上

「は、話して何かな？如月君（照）」

「僕は……」

《ガチャッ。》

「あっ？センパイ……！」

『ビクッ！』

「風？」

「うん！輝センパイ、久しぶり……！！」

「あ、ああ。」

この娘の名前は、宮乃、風（ミヤノ、フウ）僕達の一年後輩だ。

「何してるの……？こんな所で？」

「えっ？や、その。」

「あっ！木下センパイだ〜！こんにちは〜」

「へっ？あ、こんにちは！」

「わあ〜！かわいい〜！噂通りだ〜！！」

「……（照）」

いきなりフウの乱入に僕と木下さんは、驚いていた、さっきまでの緊迫した雰囲気がいっきにフウのペースに入ってしまった。

「わあ〜！髪きれ〜！！すごい 手入れど〜やってるんですか〜  
??」

「えっ？普通にだよ。（汗）」

ハイテンションなフウのペースに木下さんは困惑気味だ。

僕は今日、ここで木下さんに告白するはずだったのに…。

僕の告白は、フウの乱入で失敗に終わった。

「あつ！ヒカル先輩っ！学食行きませんか？アタシ〜お腹空いた〜  
(笑)」

「あ、うん！」

「あつ！木下先輩も一緒にどうです〜？？」

「あ、私はお弁当…あるから。」

「あつ！そっか〜！残念です〜！！それじゃヒカル先輩っ！行きましょっか」

「あ、うん！わかった。あつ！木下さん。」

「えっ？あ、な、何？」

「えっと、その〜…」

「センパイ！いい！早く〜」

「あっ！さっきの話は、また今度！じゃ、じゃあ、行くね。」

「あ、うん。わかった。」

「セ〜ン〜パ〜イ〜 ハヤく〜！！（怒）」

「わかった！わかったよ。」

九話

雪乃視点（前書き）

雪乃視点です。

## 九話

### 雪乃視点

く屋上く

私は驚いていた。

如月君は、私、以外の女子とはあまり話さない。

とゆうか、私にも用がある時以外は、話しかけてくれない。

だからいつも、私から話しかける。

如月君はいつも、何を考えているのかわからない人、ただ、ボーッとしてるのかもしれない。

だから、私はかつてに如月君は恋愛事には興味がないと思っていた。

なのに、宮乃、風ちゃんってゆう人が、如月君には居た。

私は本当に驚いた。

〈教室〉

「ハア。。。」

私は落ち込んでいた、ずっと片思いしていた人に恋人がいるかもしれないから。

そういえば、ここ最近、如月君は何か悩んでいた、そして今日、いきなり私は屋上に呼ばれた、真剣な表情だった。

私はかつてに、告白される、とか、自分勝手な想像をしていたけど、本当はフウちゃんの事の相談だったのかもしれない。

「ハア。。。」

私は泣きそうになっていた。

「どうしたの？さっきから雪乃、ため息多いよ??」

「そうそう!どうしたの?」

「えっ？な、なんでもないよー！」

「「そう？」」

「うん。」

「家」

私は帰ってくるなり、ベットに突っ伏した。

今日はいろいろあり過ぎて頭が混乱してる。

如月君に恋人……。

宮乃、風ちゃん……。

フウちゃんと少し話したけど、良い子。元気で明るくて、人懐っこくて、可愛い子。



「ハア。。」

一年近くの片思い。

今日、私は、失恋した。。

## 九話

### 雪乃視点（後書き）

僕には、感想も評価もないんですね……泣

## 十話（前書き）

更新遅れてすいません。  
ホント申し訳ないッス。

## 十話

（帰路）

「ハア」

僕は疲れていた、物凄く。

今日は木下さんに告白するつもりだった、なのに、フウの乱入で失敗。

そのままフウに連れられて学食に行き、フウのマシガン Took。

フウとは、僕が中学3年の時に知り合ってからずっと、親しい後輩だった。

親しいとゆうより、偶然学校行事で同じ係りになって少し喋ったらそれから、物凄いマシガン Took でいっきにフウのペースに引きこまれて、今にいたる。。

でも、僕が高校に入ってからほとんど連絡をとっていなかった。

そして今日、久しぶりにあったのに、その月日を感じさせない位の  
トーク、態度、テンション。。

僕は久しぶりにフウのハイテンションに、疲れていた。。。

～翌日～

《 》

「……………ん……………ハイ？」

僕は携帯の音で起きた、相手は……………。

「おっはよう～センパイ……………!」

《ビクッ!》

「……おはよ……フウ……。」

「どしたんですか? 朝からテンション低いですよセンパイ。」

「…朝はみんなテンション低いよ普通…。」

「そうですか???」

朝からハイテンションなフウに電話で起こされて僕は、疲れていた、起きて直ぐに。

く外出く

「セ〜ンパイ！こっちこっち〜！！」

「……あ、ああ。」

そんな大声出さなくても見えてるからわかるよ……フウ……。

「輝センパイっ！と、おっ買い物〜」

## 十一話

く 買い物く

「センパイ、センパイ、これ可愛くないですか？」

「あ、これかわいい」

僕とフウは買い物をしてる。

基本的にフウの買い物だけだ…。

「センパイ、センパイ」

「ん？」

「こっちのかわいい系と、こっちの大人系どっちが似合います？」

「フウはかわいい系のが、いゝんじゃない？」



「む、それってアタシには、大人系は無理って事ですか？？」

「あ、いや、かわいい系のが似合っつて意味だよ！（汗）」

「む……。」

「ホントだって！（汗）」

フウはこゝゆゝ時の勘って鋭いんだよね。汗

「こっちの服にします。」

「…そっちで良いの？」

「ハイ！（怒）」

何かフウ怒ってる、子供っぽく見れたくない時期なのかな？…気を  
つけよう。。



「……………。(汗)」

「センパイ、センパイ、何してるんですか？早く入って来てくださ  
いよ〜！」

「……………あ、ああ……………」

「センパイっ！これなんかどうですか？」

「…………………………」

## 十二話 雪乃視点

「朝」

「……ん。」

私は昨日失恋した。

「全然眠れなかった…。」

私は眠い眼をこすって起床した。

「ハア…。」

やっぱり考えれば考えるほど悲しくなってくる。

如月君が女の子を下の名前で呼ぶのは風ちゃんだけ…。

私には、

「木下さん」と呼ぶ…。

「ハア……。」

あれから、数えきれない位のため息。

「……………う……グス。」

私は泣いた、ポロポロ流れる涙が悲しみを増し、泣いた、鳴きながら泣いた。

〈正午〉

いつの間にかお昼になっていた、泣き始めてからけっこうな時間がたっていたようだ。

「ハア。。。」

涙は止まった（無理矢理止めたんだけど）泣いて少し落ち着いた時、ノックが聞こえた。

《コンコン》

《ガチャッ》

「よっ！」

「秋ちゃん」

彼は橘秋次（たちばな しゅうじ）私の家の隣りに住んでいる、昔から一緒に遊んだりしている幼馴染みで、私にとってお兄ちゃんみたいな人だ。

「雪乃最近何かあったのか？」

「えっ、な、何で？何もないよ。（汗）」

「嘘つけ、昨日の帰り何かへんだったぞ？」

「あ、……。」（泣）」

「ま、言いたくないなら聞かぬいけど、……………どうか行くかあ？」

「えっ？」

「とりあえず悲しい事はどっかに置いて、パァ〜と遊ぶぞ！」

「さっさと準備しろ！」

「…う、うん！わかった。（笑）」

さすが幼馴染み兼お兄ちゃん、こつゆづ気遣いで悲しみを癒してくれる。（ありがとう秋ちゃん）

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6680c/>

---

例え君が...

2010年10月10日02時24分発行